市民の森づくりが地球を救う

NPO法人 緑のダム北相模の森づくり

次世代育成の「若者の森づくり」
流域材活用のサプライチェーンづくり

森林破壊という負の遺産を子孫に残してはならない

特定非営利活動法人
緑のダム北相模

市民の森づくりが地球を救う

NPO法人緑のダム北相模の森づくり三原則

取材／構成＝ LANDSCAPE DESIGN　協力＝ NPO 法人緑のダム北相模

地球環境問題を取り上げたアメリカ前副大統領のアル・ゴア氏のドキュメント、解説「不都合な真実」は映画や出版になり、全世界に大きな波紋を投げかけました。地球温暖化で地球環境に大異変が起きていることは周知の事実です。今われわれはグローバルな視点を持ち、活動は足元から行っていくことの大切さを問われています。

「環境（森林）破壊という負の遺産を子孫に残してはならない」をモットーに神奈川発地球の森林を救え運動を展開しているのがNPO法人「緑のダム北相模」です。

2005 年 8 月に NGO の国際認証機関 FSC®（森林管理協議会）の認証を市民ボランティア団体として日本で初めて取得しました。 市民活動で取得した例は世界でもまれといわれています。 そして 2015 年に FSC 認証は終了しましたが、現在でもその原則に沿った市民の森づくり活動を継続しております。

わずか８００年でこの地球から森林がすべてなくなってしまう。

FSC®（森林管理協議会）本部に石村黄仁氏が送ったメッセージ

石村氏を中心とする会の活動の理念は FSC®（森林管理協議会）の本部に贈った「神奈川発地球の森林を救え」の次のメッセージによく表現されている。

「NPO 法人緑のダム北相模」は東京や神奈川など都市市民の森林ボランティア活動のグループです。私たちが管理する『相模湖・嵐山の森』は日本で 23 番目の『FSC® 認証林（SGS-FM/COC-002323）』になりました。世界では 710 番目でしょうか。市民のボランティア活動が認証を取得した例は世界的にも珍しいそうです。

1998 年 11 月に活動を開始して 15 年目に入ります。毎月 2 回の定例活動を設けて『雨でも休まず、急がず、無理せず、ゆっくり、ボチボチと』をモットーに森林整備を続けて８年目の2005年10月にFSC®認証林（SGS-FM/COC-002323）になりました。

都市市民の私たちが何故、FSC® 認証に挑戦したとお思いでしょうか。

地球の森林面積約 40 億ヘクタール
毎年減少している森林面積 512 万ヘクタール

計算上ではわずか８00 年でこの地球上から森林がなくなってしまうという衝撃的な事実を知ったからです。

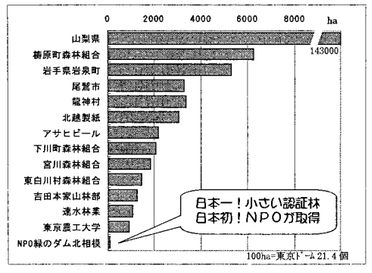
空気・水・土壌を供給してくれる森林がなくなれば私たちの子孫は滅亡です。

身近に起こっている問題として、地球温暖化、異常気象、都会に暮らす私たちこそ森の大切さをもっと知らねばならないのです。

1992 年のリオ環境サミットでカナダの少女が訴えた一言『オゾン層の穴をどうやってふさぐのですか。砂漠になった場所にどうやって森を蘇えらせるのですか。直す方法がわからないのなら壊すのはもうやめてください』この一言に触発され 1993 年に『FSC®（森林管理協議会）』が発足した事を知りました。

世界中の市民こそが環境問題、森林保全に立ち上がらなければ 800 年はもうすぐそこにせまっています。私たちは森林破壊という負の遺産を子孫に残してはならないのです」

森づくりはすなわち、環境づくりです。地球環境に強い危惧の念を頂く緑のダム北相模は、自分たちにできる地球環境改善策が森づくりであることを強調します。地球温暖化の主な原因となっている二酸化炭素の吸収源である森林を保全し、森と人間社会が健全な環境を共有することを目指して、森林活動に情熱を傾けています。



国内の認証森林と面積
（2003 年 9 月現在、作図／NPO 法人緑のダム北相模）

FSC®本部から贈られたFSC®認証林
（SGS-FM/COC-002323）の認定証

FSC
www.fsc.org
FSC® C006376

責任ある森林管理のマーク

FSC® ラベリングの例

FSC® とは、 Forest Stewardship Council®（森林管理協議会）の略号です。ドイツに本部を置き、環境・社会・経済などの一定の規準に沿った審査をクリアした森林を認証します。認証されるとFSC®のロゴマーク（左図）を使用し、林産物の差別化を図ることができます。

FSC®（森林管理協議会）の森にこだわる理由

違法伐採や人口増による焼き畑農法の為、地球の森林減少に気付いた 1998 年時点で、世界の森林面積の減少は１年間で約 400 万 ha でした。その後も減少を続け、2010 年時点の減少面積は年間 512 万 ha に増えています。（環境省 HP/FAO「Global Forest Resouces Assessment 2010」）

全ての生き物に不可欠な空気や水を補給してくれる森林が無くなれば地球は、人類だけでなく生物滅亡の世界になってしまいます。

現在、我が国は森林の荒廃に悩まされていますが、一刻も早く森林再生の道筋を付けて森林減少阻止を世界に訴えなければならない時に来ています。産業革命以来、世界は経済至上主義の下、自然を破壊し続けてきましたが、「環境・経済・社会」がバランスよく調和して持続的な社会の構築を進める運動を拡大普及する事が、私たちの使命だと思っています。

これを可能とするのは、「民・産・官・学・・・全ての協働」よって可能であると確信して「緑のダム運動」を継続・発展させています。

流域を繋ぐ理由

源流：富士山は、年間 31 万人（H25 年現在）の登山者で賑わい、周辺地域の訪問者を加えれば 250 万人になります。源流は、訪問者に森林と都市をつなぐ「緑のダム」として流域を通じて知らせる重要な意味があります。

源流：山中湖

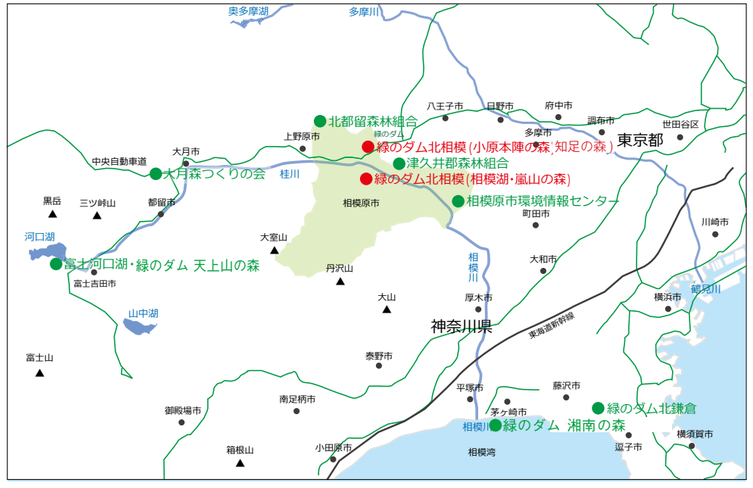
上流：大月市は、森林県・山梨県との県境にあって山梨県東部の中核都市であり、木材の大規模集積加工場・甲斐東部材製材組合や優秀な素材生産者が集まっています。

中流：相模原市や厚木市は、森林資源生産地と首都圏消費地のジョイント部分に当たり、此処が核となって機能すれば、我が国の森林の荒廃を阻止するモデル地区になるだけでなく、一次産業としての林業に新しい活路を見出す事ができます。

下流・都市部

大消費地である相模川下流域が源流・上流に思いを致し協働すれば、桂川・相模川が森林再生のモデルとなって全国に発信できます。

源流、上流（森林資源生産地）、中流（集材・加工・流通）、下流（製品流通・販売・消費）が一体となって戦略的に取り組まねば、森林問題は解決できません。



若柳・嵐山の森

小原本陣の森

湘南の森

・活動の中核となる：相模湖・嵐山の森、小原本陣の森

活動基地の相模湖・嵐山：里山交流の森

相模湖（相模ダム）は山中湖、富士山に源を発し、相模湾に注ぐ相模川（桂川）に作られた人造湖で古くから神奈川県民の「水がめ」として利用されてきました。都心からおよそ１時間の所とは思えない風光明媚な森と湖のまち相模湖町に、NPO 法人「緑のダム北相模」の基地があります。駅を降りると、東側にそそり立つ京都の嵐山に似た円錐形の山が相模湖・嵐山の森です。

活動場所は 405.9m の山頂から相模川沿に広がる扇形の北面・西面斜面です。相模湖・嵐山の森で森林ボランティア活動している対象面積は 41.8ha の私有林です。主要樹種はスギ 17ha、ヒノキ 4.5ha で、その他の広葉樹は 18.9ha です。

神奈川県の上位計画である「神奈川地域森林計画」では「資源活用型水土保全林」に区分けされており、県独自の施策である「かながわ森林づくり計画」では「森林の森づくり事業」の対象地になっています。また相模湖・嵐山の森の 64%、約 26.8ha は保安林に指定されています。

小原本陣の森：林地団地化・集約施業

相模川渓谷を挟んで対岸にある約 70ha の小規模多数の所有権者（25 人）の森です。地形が複雑で土壌が崩れやすい「小仏砂礫層」で出来ており、森仕事に経験のある会員に絞って取り組んでいます。

「林地団地化・集約施業」とは、小規模の林地を地権者の合意を得て「一つの団地化」に見立て、森林の合理的経営を実現するために「集約化した森林整備」を進める仕組みです。この方式は、森林基本法が出来た昭和 39 年来のわが国林政の重要政策ですが、細切れな地境と林業衰退の為，遅々として進まず、約 800 ある森林組合の中でも京都・日吉町森林組合、群馬・多野東部森林組合など僅かな成功例しかありません。

小原本陣の森の団地化の確実な進み状況から、24 年度からは、森林のプロ「津久井郡森林組合」と協働することが決まりました。これが成功すれば、相模原市の林政をして広くわが国の林政に影響を与える事と期待しています。

＊　写真提供＝永井広紀＊

＊

＊

FSC®ガイドラインに沿った森づくり三原則

森づくり三原則
環境：森をつくる　社会：森とつなぐ　経済：森を活かす

この会の活動はFSC®の国際認証を取得する事を自己目的化するのでなく、「相模湖・嵐山の森」の持続可能な保全と再生の方法をFSC®のガイドラインに沿った活動の指針を立て、市民だけで森林の管理・保全が可能なことを実証することにありました。
「空気・水を供給してくれる森林は特定な人のみが考えることではない」というこの会の理念に基づき、普通の人々による森林保全の方法を探ることにありました。
森林という地域の資源を社会的財産として価値を引き出し、環境の側面から森をつくる、社会的側面から森とつなぐ、森にお金を戻す経済的側面から森を生かす活動を森づくり三原則として多様な活動を展開しています。

手入れをして蘇った若柳・嵐山の森

FSC®（森林管理協議会）の歴史

1992年にブラジルのリオデジャネイロで世界環境会議が開催されました。この会議でカナダの16才の少女が「もと森林があった砂漠にどうしたら森林を取り戻すことができるのですか？」との問いかけに1993年、森林に関わる人々が集ってFSC®（森林管理協議会）を結成しました。

FSC®の基本理念は「森林環境保全、森林資源の経済性創出、持続的社会の発展」として、ガイドライン：10の原則、56の細則を採択し活動を始めました。2007年時点で世界の認証森林数は873箇所、日本では24カ所。NPO法人緑のダム北相模は20番目のわが国で唯一の民間団体による認証林を管理しています。

FSC® 行動指針

1. 全ての法律や国際的な取り決め、そしてFSC®の原則を守っている。
2. 森林を所有する権利や利用する権利が明確になっている。
3. 昔から森に暮らす人々の伝統的な利用を尊重している。
4. 地域社会や労働者と良好な関係にある。
5. 豊かな収穫があり、地域からも愛され利用されている。
6. 多くの生物が棲む豊かな森である。
7. 調査で取れた基礎データーに基づき、森林管理が計画的に実行されている。
8. 適切な森林管理を行っているかどうかを定期的にチェックしている。
9. 貴重な自然の森を守っている。
10. 人工林の形成画自然の森に影響をおよぼしていない。

左／間伐財活用のため搬出する命の森会員　右／作業道づくりに励むフォレスト・ノバの学生

小原の森林整備に取り組む川田班長

小原本陣の森（急傾斜での作業）

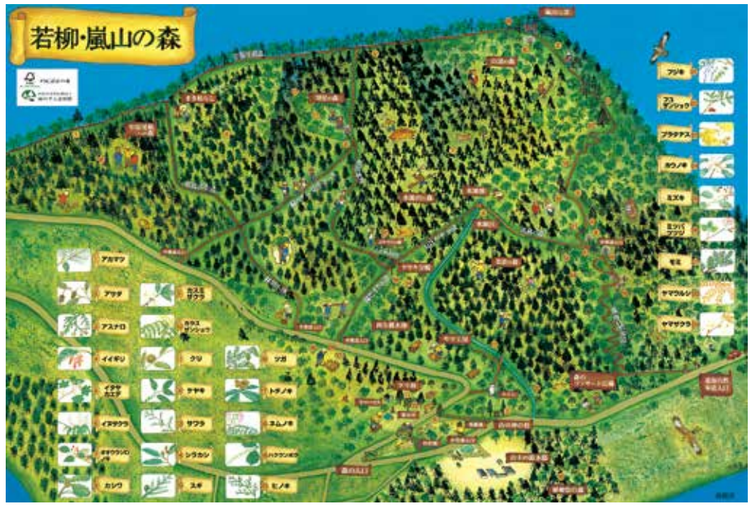
原則１　森をつくる事業／森林の「環境性」の保全

昭和39年に施行されて森林法は、時代の変化に対応するために37年を経て平成16年「森林・林業基本法」として改正されました。
改正の内容は時代の要請に従って「1、災害防止　2、水源涵養　3、温暖化防止　4、大気保全　5、生態系保全　6、保険機能　7、林産物生産　8、木材確保」の8項目となっています。概略すれば、森林の「公益性、多様性」を求めたものとなっています。私たちは、この法律を念頭に公益性・多様性を満足する活動を展開しています。

通常、65名～70名、団体参加の時は、100名以上になりますが、安全管理のために100名以内に限定しています。東京から45％、神奈川から50％、その他は5％の参加で、時にはオーストラリア、英国、韓国、中国などの参加もあります。

森林管理の基本は、森林整備（下草刈、地慣らし、植林、間伐、枝打ち）ですが、年齢層は、小学生から70歳代の高齢者まで幅広く、中・高・大学生が全体の70％と言う年齢の若さが最大の特徴です。

大学卒業後、林業に進む者も出ています。



森の案内マップ（作画：澤田真理氏）

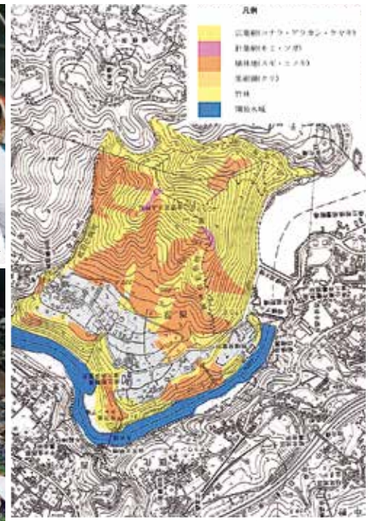
生態系調査

多くの生物がすむ豊かな森であることがFSC®のガイドラインに沿った活動であり、生態系調査が3年計画で行われました。調査には篠田授樹氏（地域自然財産研究所）をリーダーとして、樹木調査の専門家の林将之氏らも参画して、ボランティア有志も加わり本格的な生態系調査活動を行いました。嵐山に生息する主要な動植物の目録づくりから始まり、高等植物、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、底生動物、土壌動物などが調査されました。

嵐山にはフクロウといった猛禽類や、関東近郊の里山を代表する野ウサギ、ムササビ、アカゲラ、オオムラサキ、ノコギリクワガタなどが生息しています。こうした生物を絶滅させないためにも、森を調査し、どのように森の環境を保護していけるのか探ることが重要となりました。その後の生態環境についてのモニタリングシステムが、林氏と日本大学の桜井研究室のグループによって行われました。

採集した植物の分類風景

日本大学教授の桜井尚武先生（右）と研究室の学生たち


相模湖・嵐山の森 植栽図（作図：林 将之氏）

アカネズミの生け捕り

生態系調査３ヶ年計画

2002年度　基礎調査
・主要な生物種の把握　（種リスト及び分布図）
・指標種の抽出

2003年度　環境評価調査
・貴重種の生育・生息状況の把握及び保全対策の検討
・生態環境現状評価及び望ましい将来像の検討

2004年度　森林施業計画の策定
・施業による生態系への影響評価と保全ガイドラインの策定
・環境モニタリングシステムの策定

望星 & なみすけの森

「相模湖・嵐山の森」には「望星＆なみすけの森」と呼ばれる森林（0.3ha）があります。ここは以前、放置されたままの崩落斜面地でしたが、2004 年から東海大学付属望星高等学校の生徒たちが総合学習時間を利用してトチノキやスギを植栽し、森林再生作業に取り組みこれまでに、300 本を超える植栽を実施しています。2009 年に科学技術振興機構の「サイエンスパートナープロジェクト」の採択を受け、日本大学生物資源科学部の桜井尚武先生の指導で生態系調査に取り組んでいます。2010 年からは杉並区立高井戸中学校の生徒と卒業生も加わり、新たに「望星＆なみすけの森」として活動を共にしています。

「フォレスト・ノバの森」

2006 年、麻生大学の学生が中心となって生まれた団体「フォレスト・ノバ（ForestNova）」は、森と人の共助共生社会を目指す、という理念のもとに相模湖・嵐山の B 地区（約1ha）の森で森林整備活動をしています。「フォレスト・ノバの森」では学生たちがどんな森にしたいかを話し合いながら作業路づくり、間伐、植生調査などを行っています。また間伐材を利用して作品づくりのワークショップや各種イベントで作品を販売して、森林の大切さや森林整備の必要性を社会に伝える活動を展開しています。その成果が認められ、第9回全国大学生環境活動コンテスト（エココン）2011に参加して、準グランプリ受賞の快挙を成し遂げました。

花畑づくり、養蜂活動

この花畑づくりは 2002 年 3 月にドコモの鉄塔工事で荒れた一部の敷地を里山風の花畑づくりを会の活動として始めました。

全体が傾斜地のため、棚田風花壇、森から移植した樹木や潅木、水はないけどせせらぎに見立てた流れ、果樹園など会員の自主活動で行ってきています。

今では地元の市民の散策路になっており、森の活動を理解してもらうための森への入り口として役立っています。またこの梅林で毎年参加者が野点などを楽しみ森の活動の交流や癒しの場にもなっています。その他会員の黒川氏がニホンミツバチの養蜂にも取り組んでいます。

左上／望星の森の案内板を立てる宮村連理先生と生徒さん
左下／学生連合フォレスト･ノバの活動
右上／高井戸中学校の生徒たち
右下／望星&なみすけの森を整備する高井戸中学校の生徒たち

上／地元有志による植え付け
下／造作前のドコモの鉄塔周辺の土地

せせらぎ見立て沿いのアヤメ，
ギボウシほか

養蜂の説明をする黒川さん

花畑にある梅林での茶会風景

里山風花畑全景

原則 2　森とつなぐ事業／森林と都市「社会性」を繋ぐ

都会の人々に森林保全の大切さを理解してもらうために、森に来て体験することを勧めています。そして森で楽しみながら、理解を深める事で都会の人々と森をつなぐ活動としています。

緑のダム体験学校

緑のダム北相模には専門家に近い知識を持つ人が多く、植物や生態系から、建築、造園と幅広く、そうした多様で豊かな人々の知識を少しでも役立てるため「森の学校」がスタートしました。学校の活動は、初めて森に訪れる人に基本的な知識を授け、その後の活動を楽しめるようにする体験学校や、森の生態系調査、樹木ツアーなど、気軽に参加できる学校がその都度催されています。

森の学校を始めた頃、FSC® という目標もあり、生態系に詳しい篠田授樹さんをはじめ、専門家たちとともに森を巡っての学校が開催されました。森の学校の校長・斉藤憲弘さんは、「学ぶといいうより、体験するという気持ちで参加していただき、自然に目覚めてもらいたい」。

緑のダム北相模のメンバーには多種多様な専門家がおり、森の学校もユニークなカリキュラムが生まれています。

地域活性化：小原本陣祭

地域社会の活性化には、伝統と歴史を育むお祭りには大きな意味があります。

小原本陣の森の小原町内会は、毎年 11 月 3 日の「文化の日」には〝小原本陣祭〟を町を挙げて盛大に開催しています。相模原市・加山市長始め，市の産・官・学の主だった重鎮が顔を揃えてくれます。

こんな時も「緑のダムとフォレスト･ノバの学生」は、応援に駆け付け、槍持ち・奴・駕籠かきのなどの重労働を引き受けます。祭り終了後の慰労会では町内会の人々から歓迎され交流を重ねています。

参加者をガイドする緑のダム学校校長の斉藤憲弘氏

日中友好中国青少年団訪日

「緑のダム体験学校」

2009 年8月 25 日に、森のない様々に異なる環境の中国 33 省庁から、選ばれた小学生 16 人、中学生 16 人、高校生 10 人の 42 人の秀英とその父兄、官庁職員など総勢約 93 人が若柳・嵐山の森の「緑のダム体験学校」に参加しました。青少年たちは中国で書道を学ぶ秀英で、26 年前から交流のある成田山新勝寺の協力で訪日しました。

中国の中央政府から選ばれた青少年を迎え入れるのは日本でも初めての事で、緊張と期待の中、全国インストラクター神奈川会（JFIK）の応援も得て、約 30 名のサポート体制で一行を迎え入れました。

流域ネットワーク

相模川の上流で活動する緑のダム北相模は、源流の緑のダム天上山に発し、その下流で活動する「緑のダム北鎌倉」と「緑のダム湘南の森」とも連携・協力し、森林保全活動の流域ネットワーク化をはかり、森と都市市民とをつなぐ活動を展開しています。また、全国森林インストラクター神奈川会（JFIK）のメンバーを組織に迎えるなど、森林保全の組織との連携も広がりつつあります。

親子 2 代で活動の場を提供していただいている
山主の鈴木重彦さんとご子息の史比古さんは
私たちの恩人です。

水源の森を守り育ててきた故鈴木重彦氏の生家は 1949 年から 15 代続く北条家に仕えた旧家ご出身で、山林地主の家系の生まれ。地元のために相模湖ダム建設に心血注いで取り組み大きく貢献した地元の名士です。「水没前の相模川は山水画のようにきれいでした。相模湖のダムは戦前も戦後も神奈川県の発展のために電気・水を供給するためにできた日本で初めての人造湖で、果たした役割は計りしれません。都会の人にぜひこの歴史とこの相模湖の地を忘れないでほしい」と私たちに生前よく語ってくれました。そして今はご子息の鈴木史比古氏に続けて活動の場所を提供していただき、当会の理事としても活動を支えていただいております。

午前中は山主の鈴木家のブルーベリー農園での摘み取り、流しソーメンなど、を楽しみ、昼食後に行われた歓迎イベントでは、絵本を使って森について学習したり、草笛や詩吟が披露されました。

午後から親子 6 班に別れて森へ入り猛暑の炎天下から一変、森の中はひんやりとし心地良い自然のクーラーと感じたようです。森を体験したことのない子ども達は森のすばらしさに驚きを隠せない様子でした。

インストラクターとともに、手で触ったり臭いをかいだり、特に生態の話にはとても真剣で、目を輝かせていました。このイベントに対して中国政府高官からも高く評価され、日中交流に大きく貢献することができました。

左／大学生のグループ「フォレスト・ノバ」の代表・神宮理沙さん
中／詩吟を謡う井伊直充さん　右／草笛を披露した瀬尾克美さん

中国青少年団一行に挨拶する
山主の鈴木史比古理事

NPO の活動指導に当たっていた
2003 年当時の鈴木重彦氏の雄姿

甲州古道復活事業

相模湖駅付近から山梨・笹子までの約 60km もの区間において、古道を調べて道標を建てる取り組みが行われました。相模原市では、当面、相模湖から上野原市境の間を整備しようと緑のダム北相模に協力を依頼。最初は、道標づくりの要請があり、森の間伐材（FSC® 材）を使って道標づくり行われました。

この要請がきっかけで、古道探しが始まり、役所や国土交通省では、何度も造り変わった道の経歴を調べるのは困難という事で、地元の人や郷土愛好家、歴史研究家にも協力してもらい少しずつ解明していきました。地元の中には自分の足で何度も歩いて古い道を記録している人もあり、古道探しに興味を持ってくれる人が自然に集まってきました。

関心の高さは予想外に大きく、JR 東日本が古道を歩くイベントを行ったり、相模湖では地域一番の観光コースにしようという計画も生まれつつあります。上野原では国道が遠く、古道を復活すれば町の観光に役立つと期待されています。緑のダム北相模の斉藤さんは、「あまり大袈裟なことはやりたくありません。一度に大勢の人が歩いたら道が壊れたり、民家や自然が被害を受けてしまいます。そういう一過性の集客イベントでは長続きしなくなる可能性がある」と話しています。

しっかりした地図と道標があれば、好きなときに自由に歩けます。その様なフリーウォークが甲州古道では尊重されています。甲州古道の調査隊は森の仲間以外に地元の山主、市職員、教師、それに絵本作家などもいました。絵本作家は甲州古道の 4 つの宿場を舞台に 4 つの民話をとりあげ、それを紙芝居にして公演するという試みも行われ、さらに紙芝居には舞台が必要と、立派な木造の舞台までつくる人が現れ、つながりが広がっていきました。

道が復活すると、その近辺の見過ごされてきた古い構造物にも光があたり、地域が見直されていることにもなります。この記録は国会図書館の蔵書にもなりました。

甲州街道沿いにある小原本陣

NPO が相模湖町から請け負った道標（書：中里利夫氏）

国・国会図書館に蔵書：殆ど，散逸している古文書を継ぎ合せて古道ルートの藪をかき分けて痕跡を探した。高尾～小仏峠～笹子峠の約 60 kmの藪をかき分け古道を 3 往復して、このルートの探索を成し遂げた。この記録の功労者は、上野原市在住の元・相模原市の中学校校長を務めた井田史郎さん。

相模原市民桜まつりに参加

60 万人以上の人出のある相模原桜まつりを相模原市は毎年 4 月開催し、今年で第 39 回目を向かえました。緑のダム北相模は、森林保全活動の流域ネットワーク化をはかり、森と都市市民とをつなぐ活動のために 5 年前から（昨年は 3・11 で中止）市役所横の第 2 駐車場 2 F を借り切って森林広報を実施しています。今年は、相模原市、㈳国土緑化推進機構、公益財団法人相模原市みどりの協会の後援を得て「実践・さがみはら森林ビジョン」をテーマに、民・産・官・学：15 団体の参加協力を得て 4 月 7 日～ 8 日、快晴の会場で入場者数、7,500 人～ 8,000 人を得て開催しました。特に、森の駅推進協議会、相模原市林政幹部、市議会との森林・林業に関する意見交換は有意義でした。津久井郡森林組合（相模原市）と北都留森林組合（山梨東部）との県境を繋いだ協働・連携出展は、画期的

森の積み木で遊ぶ参加者たち

桜まつりの出展風景

原則 3　森をいかす／「経済性」：木の製品化を図り森にお金を返す活動

森を健全にしかもサステナブルに維持管理するためには間伐は欠かせない作業です。しかし、現状は切り捨て間伐として利用されないで放置されています。森を生かすために流域材を活用して製品化を計り、森にお金を返す活動を行っています。

東京駅イベント

3 月 28 日～ 4 月 1 日の 6 日間、東京駅八重洲北口キッチンストリート内のイベントスペースで現在、復元作業中の東京駅舎を間伐材の積み木を使って再現する参加型イベントを行いました。イベントでは、高井戸中学の生徒が中心となり、上智大学アジア人材養成研究センター指導、JR 東日本、同社グループの鉄道会館協力のもと、本会の積み木 3 万個を使用しました。

昨年夏に試作をしたとはいえ、東京駅地下街でしかも一般参加自由の中での制限時間内での完成はかなりの不安もありましたが壊れても壊れても淡々と積み上げていく彼らに、参加者も感動し見入っていました。

積み木プロジェクト

FSC® 認証を取得した「相模湖・嵐山の森」で間伐材の利用促進を図り森にお金を返す仕組みとして商品開発を行なっています。

「森の積み木」も会が製造・販売している商品の一つです。

また、積木で遊ぶことで脳を刺激し、筋肉を動かすのでリハビリテーションのツールとして高齢者の介護施設でも使われております。

また、3,11 以降のボランティア活動の一環として、被災者の子どもの心を少しでも和らげる事が出来たらと大船渡市の保育園 15 か所を回って森の積み木を持参し、被災地の子供たちと一緒に楽しい一時を過ごしてきました。

間伐材活用プロジェクト

間伐材の活用プロジェクトは、地元の相模湖商工会と NPO 法人緑のダム北相模、民間企業が協働して「森林再生事業促進実行委員会」を組織し、森林再生事業を創出する活動として、2008 年から広く全国に募集し、間伐材を生かした「森づくり・モノづくり」コンテスを 4 年間実施してきました。

その結果として八百数十点余りの応募作品が集まりました。コンテストは「間伐材活用部門」と、森全体を考える「ランドスケープ部門」を設けさらに、相模原市内の小学校と連携し、「子ども部門」も用意しました。また子ども部門では、小学生自らが審査員を務めました。

そして 2011 年秋、東京で開催された「第 24 回世界建築会議（UIA）」のビックイベント「UIA2011 東京チェアシティ展」に参加し、丸の内オアゾ○○広場で優秀作品 5 点を地場のスギ材を使って地元木工職人が製作し、9 月 25 日から 10 日間の展示とトークショーを実施しました。この成果として地元の間伐材活用システムの道が開け、地域が自立できる間伐材活用促進事業の進展が期待できる事です。

下／NPO法人緑のダム北相模が間伐材で製品化した「森の積み木」を持参し、被災地の子供と一緒に楽しみました

上右／ UIA2011 東京チェアシティ展参加コンペの募集パンフと受賞作品　中左／第 1 回森づくり・モノづくりコンペ子ども中間受賞作品試作
下／オアゾ○○広場で開催されたイベント参加者と受賞展示作品

林地団地化事業

相模原市・市民協働提案制度に基づく「林地団地化事業」を始めたのは、3年前でした。

目標は、群馬県多野東部森林組合・京都府日吉町森林組合が実施しているような集約施業のための林地団地化でした。

しかし、上記2つの例は森林組合が主体の集約施業であり、NPOが行ったものではありませんでした。

このため、この事業の課題は、一つは山主との信頼関係つくるための林地団地化で、集約施業の合意を取り付ける事であり、もう一つは事業終了後に継続的に集約施業を推進する運営母体を構築することでした。

森林組合が担うのが最適と考えられましたが、当時は、林地団地化・集約施業に積極的に取り組む森林組合がいなかったので、3年間で行うことを目標に、協働事業が始まり、模索と試行錯誤の3年間でした。

1年目(H21年度)は森林整備と同時に植生調査・土壌調査の基本調査を進めました。

(資料ー①植生調査報告書より)

(資料ー②土壌調査報告書より)

・それと並行して、山主会をつくり山主との関係構築に取り組みました。

2年目(H22年度)は基本調査を踏まえて、小原本陣の森の路網整備調査を行い、林業としての収支を検討しました。(資料ー③路網整備調査報告書より)

集材範囲を路網から20 m、50 mの場合で収支を計算した結果、単独事業としては赤字であるが、間伐補助金を含めれば利益が出ると試算されました。

(路網調査報告書 P.26 ～ P.29 より)

・山主会の準備会が発足し、団地化に向けて踏み出しました。

3年目(H23年度)は山主会の拡大を目指しましたが、津久井郡森林組合が新年度から新たに実施される長期受委託制度を視野に入れて、小原本陣の森の「林地団地化事業」への参加に積極的に参加を表明しました。津久井郡森林組合の参加は 、今後の協働事業進展のための大きな成果といえます。

その結果、平成24年度の長期受委託制度に、小原本陣の森は千木良・青根とともに採択されました。

将来的には地域広域化をはかり津久井郡森林組合が進めているGISによる山主約1,500人のデータベース化と協働事業の「小原本陣の森の調査と林地団地化の手法」が合わさることにより、相模原市の森林全体への広がりが期待されます。この両地域が協力すれば、主力材の津久井のスギ、山梨のヒノキで首都圏への木材供給地域として発展が可能であり、相模川流域全体が活性化する事になるでしょう。

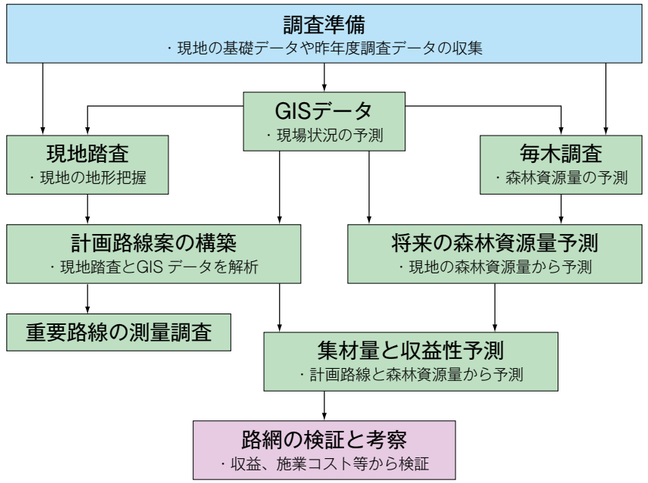
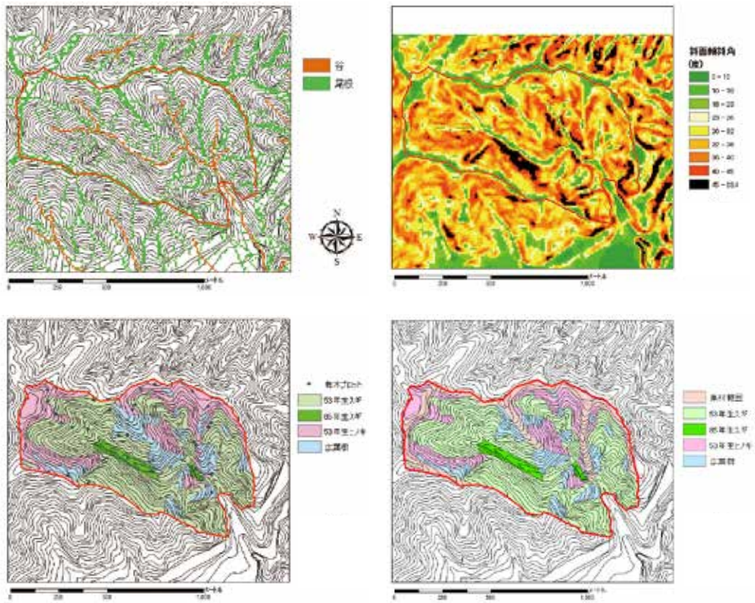


図2　調査フローチャート



左・中／路網調査　右／検土調査

■若者の森づくり

宮村連理（緑のダム北相模　理事）

知足の森

2015年から始まった本会3つ目のフィールドは「知足の森」と呼ばれている。この森は、中高大学生が中心となって活動する「若者の森づくり」のフィールドである。この森で臨済宗建長寺派である長福寺の住職で地主でもある野呂真格さんと活動を開始した。名前の由来である「知足」は「足りていることを知る」という意味で、環境教育、森づくり、禅宗の教えというこの森への3つの思いを込めたネーミングである。環境教育としての森づくりを通して、自然と関わり、自然に生かされているという実感を持つことで、現代社会の物質的な豊かさを追求する姿勢を反省し、まさに足りていることを知ってもらいたいという思いがある。森づくりの視点として、森づくりは工業生産などとは違い人間の思うようには計画、実施できないものである。その変化していく森の姿をあるがままに受け入れ、森と関わることは禅宗の教えにもつながっている。禅宗の教えから学びたいことは「必要なものは最初から持っている」(同じく臨済宗の円覚寺横田南嶺さんの言葉)、仏性という考えにある。森には人が生きていく上で必要なものは全てそろっているし、同じ場所、同じ季節、同じ時間でも違う表情を見せる森との関わりの面白さは無限である。ゲーム機もインターネットも必要ない。全てそろっているのである。これら3つの思いをもって取り組んでいる「知足の森」では「望星の森」で取り組んでいる森林GISの有効性を実証したいと考えている。他の人工林同様、長福寺さん所有の周辺には多くの地権者がいる。その境界線の確認は困難を極めているため、作業に必要なレベルの境界線をGPSや簡易測量で簡便に安価に調査できれば、地域に整備計画を提案でき、手入れのされた美しい森を広げることができると考えている。

幸運の雨。作業ができない日は座禅体験をさせてもらいました。

萌芽更新が進む広葉樹の森での除伐作業。森が明るくなっていく姿にやりがいを感じる。

望星の森

望星の森は2005年から崩落跡地にトチノキの植樹を始めた区画とその周辺のスギ、ヒノキ林の約3 haの森である。この森では、東海大望星高校、2010年から杉並区立高井戸中学校、2015年から三鷹市立第二中学校が地球環境部という形で、継続的に森林整備を行っている。

トチノキを崩落後に植樹しているという事例がこれまでなく、大日本山林会副会長の桜井尚武先生からご指導いただき、育樹方法について定期的な毎木調査に基づく研究を行っている。周辺の人工林では全てのスギ、ヒノキにナンバーが振られており、間伐本数、材積、GPS位置情報を森林GISで管理する取り組みを中高生が中心となり行っている。

望星の森周辺での間伐、枝打ち。間伐した木は樹高、胸高直径、位置情報がネット上で公開されている。

フォレト・ノバの森

釜谷　優太（麻布大学3年生 / 緑のダム会員）

Forest Nova ☆は現在、嵐山のB地区をお借りして毎月1回森林整備活動を行っております。この森は主にヒノキの人工林で、樹齢は60～65年です。Forest Nova ☆では、嵐山の地主である鈴木様の"100年性の森づくり"と"生物多様性の豊かな森"を目指し、年間計画を立て活動に取り組んでいます。

Forest Nova ☆では森林整備活動として、光の入り方や木の様子をみて選木した木の間伐を行ったり、伐った木材を降ろし啓発活動や木工体験のために製材作業等を行います。その他にも間伐前と後の比較を行うための植生調査、間伐する木材を運んだり、活動を行うための経路作成、整備を主に行っています。

現在、Forest Nova ☆では、木材の活用として、環境に係るイベントでのブース出展による啓発活動や児童館での木工体験でのヒノキの箸やストラップ、オブジェづくりを行っています。

■麻布大学と「学術交流協定」を締結

平成25年6月に麻布大学とＮＰＯ法人緑のダム北相模が連携協力する「学術交流協定」を締結

平成18年正月、麻布大学生学生たちが「学生連合：Forest Nova」を立ち上げ、翌月から学生達が数名定例活動に参加する事となった。学生の活動の舞台として「Forest Novaの森」を当会が提供し、確実に活動を積み上げ平成28年までの今日に至っている。平成23年に「全国大学生環境活動コンテスト」では準グランプリを受賞するなどの成果を上げている。また平成25年6月に麻布大学とＮＰＯ法人緑のダム北相模とが連携協力する「学術交流協定」を提携した。

今日まで毎年「Forest Nova」の卒業生の中から林業関連にも就職し、活躍している。定例活動にも時折参加し、後進の指導に当たる等ＯＢとの連携も促進し、「学術交流協定」も進展しつつある。

■緑のダムを卒業した若者たち

滝澤康至（たきざわやすゆき）
マリンフーズ株式会社
現在は水産会社に勤務し、国内の原料や商品の仕入業務を行っています。人とのつながりを大切にする姿勢を緑のダムとの関わりで培えました。今でも仕事に活かせる自分の財産となっています。

二藤政毅（にとうまさき）
現在は巣山林業で林業作業を行っております。学生時代は ForestNova ☆で色々な事に挑戦させて頂けたことが良い思い出となっております。

齋藤駿一 (さいとう しゅんいち)
静岡県浜松市天竜にて林業に従事後 現在は株式会社 木林士に勤務し、伐採業務を行っています。思い出は、嵐山で初めてチェーンソーで間伐した事。木を伐る意義や魅力を全身で感じ、その体験が今に繋がっています。

瀬戸 智大（せととともひろ）
（一社）日本森林技術協会
私は、小笠原で生態系の修復に取り組んでいます。
なぜ森を守るのか、なぜ生態系は大切なのか相模湖の森で活動して感じたこれらのテーマを大切にし、仕事に取り組んでいます。

磯崎愛永（いそざきかなえ）
宮崎森林管理署都城支署
社会人になって一年が過ぎました。法に則って仕事をこなす日々ですが、学生時代の活動を通して学んだ「なぜ？」と考える姿勢をこれからも大切にしていきたいと思います。

神宮理沙（じんぐうりさ）
株式会社相模原木材センター
相模原の材木問屋で営業をしていまして、神奈川県の木も扱っています。学生の頃いっとき週４で嵐山に行っていたこともあり、相模湖の森や人から沢山のことを教わりました。

吉崎香代 (よしざき かよ)
現職 : 電子カルテ操作案内
思い出 : 小原の森での森林整備、緑のダムの皆様の知恵と技術に感動するとともに自分たちで考え整備していく難しさと楽しさを知りました。

治田世以良 (はるた せいら)
上野原市地域雇用創造協議会
実践支援員（林業分野）
・Forest Info 代表
緑のダムの方々には定例活動の中で、森林整備から人生観についてまで様々なことを享受していただきました。

吉田あさぎ (よしだ あさぎ)
東京芸術大学大学院
その時その時で全力だったので、もう随分と前の出来事のように思えてあまり記憶にないというのが正直なところです。ただ、わずか１年と少しの間に嵐山で体験した体のざわつくような感覚はすごく鮮明に思い出すことができます。

浅野雅樹 (あさの まさき)
現職 NPO センター鎌倉
鎌倉市の市民活動を活発化される取り組みを進めています。
○学生時代の思い出
麻布大学との協定を結んだことです。日頃の地道な活動が実を結んだ結果だと感じました。

金井美穂 (かない みほ)
現職名 : ユニバーサル園芸社
My 鉈を買った事もですが、それ以上に多くの人と交流する機会が圧倒的に多かったことが、今思うと驚きですしありがたいことだなぁと感じています。現在、植物のレンタル・販売をしている会社に勤めています！

曽原正博 (そはら まさひろ)
日本ファシリオ株式会社
私は４月から施工管理を行っている会社に勤めます。緑のダムさんとの活動を通して、森という複雑化された場所での貴重な経験を積むことができました。

山田和彦 (やまだ かずひこ)
会社名 : 戸田森林組合
私は嵐山で森を手入れすることの大切さを緑のダムの皆様から教わりました。
大学卒業後は、地元の森林組合に入り、静岡の林業を盛り上げていきます。今後も宜しくお願い致します。

芦田梢 (あしだ こずえ)
ここでは森林整備等の体験をもとに、様々な人へ向けて森林学習を行うことができました。卒業後はホールアース自然学校というところで自然体験学習を仕事にしたいと思います。

清水池紋佳 (しみずいけ あやか)
インテリア関係の設計デザイン
初めて見た間伐の目前で大きな木がゆっくりと大きな音を立てながら倒れていく様は、恐怖を感じながらもとても興奮しました。

緑のダムから巣立った若者たちへ、贈る言葉

桜井尚武（大日本山林会　副会長）

相模湖駅から大きく盛り上がって見える嵐山、その山襞に育つ様々な木、木材生産のために植えて育てられているスギやヒノキもあります。森林が持つ多面的な機能を感じたかどうかはさて置き、都会にはない資源であり生活財である林産物、それを自分の手で、肌で体験し伐ったり測ったり遊んだりした経験はきっと今後の人生の糧になるでしょう。

社会に独り立ちして出て生きてゆくのは大変なことですが、まあ誰しもが通る道ですからなんとかなるでしょう。その過程で、あの林地にある様々な資源を有効活用する方策が頭に浮かんだら、仲間を集めて使ってみて下さい。そんな君たちを待っている林地は、今の日本にはアチコチにあるはずです。売るためにではなくて、使うために収穫し細工するというのが大事だと思います。余分があったら、欲しい人がいたら分けてあげればいい、もちろんこれには対価を頂くのは当然ですが、楽しく仕事をするためには欲しいものを欲しい人と作って使うのが始まりだと思います。

北相模に集って得た経験とそこで得た仲間を大事にして、行ったところ、赴任したところで新しい仲間と新しい世界を作ってください。「一に健康二に安全」をモットーに楽しい世界を作ってください。

楽しかったこと、得意になって自慢したいことを見せびらかしに古巣嵐山に来てください。疑問や悩みがあったら、できたら、その時も嵐山に来てください。語り合いましょう。誰かが似たような悩みを持っているもんです。もちろん自慢したいことも持っている筈です。

もう一つ、Give and Take という言葉がありますが、Give and Give という行動もいいもんですよ、対価を求めないだけ悩まなくて済みます。

嵐山で指導に当たる桜井先生

フォレストノバ OB の皆さんへ

内野郁夫（緑のダム北相模理事）

初めて嵐山の森を訪ねたとき不思議に感じたことがあります。なぜ多くの若者たちが土と汗にまみれる場を選んでいるのだろうかと。休日ともなれば街に出て手軽に楽しい時を過ごしたい。それが普通の大学生の心情とばかり思い込んでいた私には新鮮な出会いでもありました。ある日、その理由を聞いてみたことがあります。しかし彼ら、彼女らからはさほど明確な答えは返ってきませんでした。たぶん都会の生活では得ることのできない何かが森にはあることを若い感性は本能的に捉えていたのかもしれません。

人は森に入ると素直になれます。年齢、経歴も様々な人々が互いに分け隔てなく交流できる場は貴重です。大学の４年間、この森に通い続けた経験は林業関係の仕事に携わるか否かに拘わらずきっと人生の宝となることでしょう。社会人となり多忙な日々をお過ごしと思いますが、機会があればぜひまた嵐山に足を運んでみてください。森の新鮮な空気を胸いっぱい吸い込み、ともに語り合える日を心待ちにしています。

相模原市立新宿小学校の４年生に森林体験学習を行う

■流域材活用のサプライチェーンモデルの構築――富士ブランド化を目指して

石村　黄仁（緑のダム北相模代表理事）

森林の荒廃に気付き、新宿から約１時間の距離にある神奈川県・旧津久井郡相模湖町・「貝沢の森」で 1998 年 11 月から森林ボランタリー活動を始めました。2002 年に相模原市緑区の嵐山に約 41ha の森を借り受け、NPO 法人の登録をして 13 年間を経ました。そして 2015 年度の総会で以下の新たな活動方針を採択しました。

①後継者育成：知足の森（相模湖・与瀬地区）
②流域材活用：サプライチェーンモデルの構築

◎サプライチェーンモデル構築を目指す目的

森林の国際認証である FSC（Forest Stewardship Council）は、「森林環境・社会・経済」がバランス良く調和機能することを求めています。我が国は森林率が 68％の世界第３位の森林国ですが、国産材の自給率は約 25％です。外材輸入が 70％占めており、森林・林業が産業として機能していません。

2012 年４月、林野庁・林政部から「森林 NPO の目線で政策提言して欲しい」と依頼されました。

その年の９月に（公益法人）大日本山林会元会長の箕輪氏と数人の方が相模湖・嵐山の森」にお見えになりました。その時に 10 月の大日本山林会のシンポジュウムのお誘いを受けシンポジュウムに参加しました。そこでも箕輪氏から林野庁・林政部と全く同じ要請を受けたのです。そこで、改めて我が国の「森林・林業」を考える事にしました。　富士吉田市・河口湖町に「緑のダム・天上山の森」があり、活動しています。2013 年７月に富士山が世界遺産に登録され、富士源流・上流の人々の間で「富士山を改めて考える機運が高まりました。緑のダム「天上山の森」もこれに賛同しました。

■取り組みの経緯と活動内容

富士山・山中湖（山梨県）を源流に湘南海岸（神奈川県）までの 131 ｋｍを「桂川・相模川」は流れ相模湾に注いでいます。「桂川相模川流域協議会」では源流・上流・中流・下流と都市部をつなぐが活動をしています。私はこの協議会の森部で活動しているため、源流・上流部の森林（供給地）に関わる知己もいました。「森林・林業の復権」を意識するようになり、下流部（需要地）の川崎市や横浜市との交流関係も見直しました。

南都留森林組合の管轄内の道志村は、横浜市の水源として横浜市水道局の管理下ですが、「緑のダム」との交流もはじまっています。

◎活動内容：「森林・林業の復活」という雲を掴むような課題を、酒井秀夫先生（東大院・森林利用学研究室、教授）に分かり易く指導して頂きました。

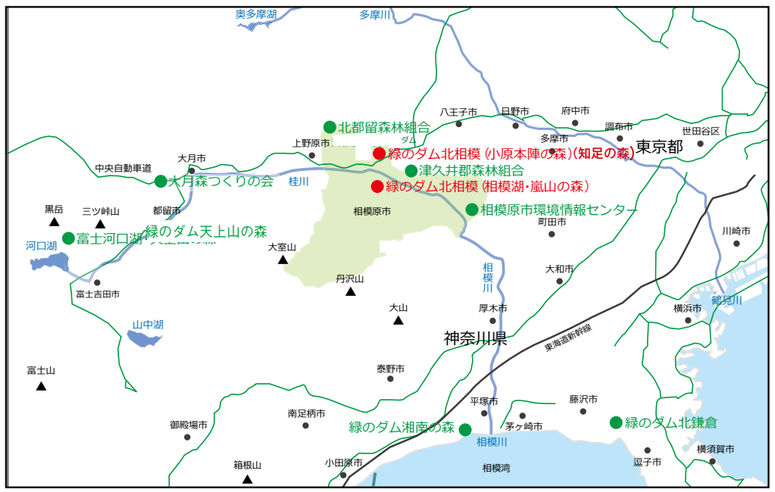
そのテーマが「富士ブランド・流域材サプライチェーン構築」です。これは、林学と言うよりは「サプライチェーン構築」という経営実学です。

林動を継続・発展させながら、林業経営の市場調査、人脈つくり、商品開発等の発想へ広げていくものです。

日本は周囲を海で囲まれた南北 3000km の森林・火山列島で、北は亜寒帯、本州は温帯、四国南部、九州、沖縄は亜熱帯です。地域によって草木が異なり地域の文化も地域にも特徴があります。また、日本人は、西欧狩猟民族と比べると平和な農耕漁労民族です。

例えば、愛知県の三河湾に注ぐ矢作川の源流は、長野県下伊那郡の根羽村一帯です。根羽村

桂川・相模川流域のネットーワーク化を図る



の約束は「陽通し、風通し、水通し：親が植え、子が育て、孫が伐り・植える」だそうです。矢作川中流・下流の安城市・豊田市・刈谷市等の人々の合言葉は「水は自ら創る」として源流・上流の人々が協力をしています。（酒井秀夫著、林業生産技術ゼミナール；全国林業改良普及協会編）先ず、お互いの信頼関係づくりが大切だと教えています。

「サプライチェーン構築」の三要素は「①生産（供給）＋②商品開発・製品化・流通＋③市場開発（需要）です。

現代の林業には、この連携がなくバラバラです。国産材流通占有率が 30％で輸入外材 70％では、日本の風土に合った「商品開発」が出来ません。建築材や製品の流通体制が正常に機能していなければ流通コストは、高いものに付きます。

森にお金を戻さなければ、質の良い木材を生産し、供給できません。消費者が満足する質の高いデザインの住居・家具・調度品等が生まれなければ需要は伸びません。

「自然と共にある一次産業の農業に携わる農民の皆さん、あなた方は神の事業の代行者なのです」。

これは、私が韓国滞在中、「韓国有機農業研究会・全国大会」で述べられたソウル総合大学・柳達永総長の教えでした。

森林・林業の復活」のために最も何が必要なのでしょうか。その答えは「自然の摂理の中にあると思います。もう一度自然から学び、得られる「知恵」を生かした林業・農業を再考し、再生することが今求められています。

桂川源流地域協議会発足記念シンポジウム
(2015年6月28日)

第21回流域シンポジウム
(2015年12月6日畠山重篤氏を招く)

上・下：富士吉田市・河口湖町にある「緑のダム・天上山の森」の森林保全活動

忍野ユネスコ協会の環境保全活動

流域材活用事業のためのサプライチェーンづくり

酒井秀夫（東京大学大学院農学生命科学研究科森林利用学研究室教授）

県の職員で、林業の研修に参加した方のレポートに「日本に生まれてよかった」というのがありました。石村黄仁代表の活動の根底を貫くのも「負の遺産を子孫に残さない」です。

日本の良さって何でしょうか。気候、空気、水、人、米や魚などの食、あるいは旬の食材。本当に素晴らしいと思います。これらの源は森林です。主要造林樹種のスギ、ヒノキは日本特産です。温帯における広葉樹などの豊富な樹種も日本の森林の特徴です。スギ、ヒノキは世界で日本だけに分布します。スギ、ヒノキはそれぞれにすぐれた特長があります。スギ、ヒノキの良さは、林業の専門家、ましてや世界の人々にはまだ認知されていません。本当の理解には文化の理解が不可欠だからかもしれません。

その森林、人工林が育ってきました。この森林を次代にリレーしていく上で大事な時機にさしかかってきました。適材適所にいろいろな木材を使った和風建築の良さも見直して、木材の利活用をもっと広めて伝えていく必要があります。日本の林業も伐れば材木にしてすべて売れていた時代がありました。しかし、これからは内外の木材需要の喚起とともに、消費者のニーズをとらえて木材を生産し、木材の有効利用化を図っていく必要があります。

そのためには、川上の森林側から川中の工場、川下の工務店、市民がしっかり手を組んでお互いの利害、主張の調和をとっていく必要があります。どちらかの一人勝ちというのは存続しえません。

今まで林業は川上と川中・川下の活動が分断していました。情報も遮断されていました。情報の時代にあって、お互い何も知らずに情報を生かせずにきました。情報の遮断は木材のサプライチェーンを組むにあたって致命的です。

これから川上から川下までの関係者が一堂に会して、情報交換、劇場化が必要です。一人一人が主役となってドラマを作っていかなければなりません。資源があるというのは本当にありがたいことです。

そして、森林づくりとともに、森林を育て、活かし、使う人づくり、役者づくりもいまが一番大事なときです。

■連携団体の活動

■（一社）さがみ湖　森・モノづくり研究所

緑のダム北相模での活動を進展させるため、生産から加工・販売までの製品化と地元材を活用した地産地消システムづくりのために 2012 年に「さがみ湖・森モノ づくり研究所」を設立した。

そして地元材（間伐材）を活用した市の協働提案事業に「津久井の間伐材で森林を再生する商品開発および環境学習事業」が採択された。 地域の大切な資源である森林保全のために、森林面積の約半分を占め放置されていた広葉樹の有効利用と小学生の森林環境学習をセットにしたコンセプトで３年間実施した。従来の合板の学習机の天板を地元材でつくった広葉樹の集成材の天板に替えると共に、環境学習が始まる小学校４年生の総合学習の授業として、相模原市のサポ―トを受け３団体と協働し３年間この事業に取り組んできた。

相模原市中央区の新宿小学校を皮切りに、南区の緑台小学校、緑区の相原小学校をモデル校とし校内学習からスタートし、天板取り付けと制作工程の学習、「相模湖・嵐山の森」での森林体験学習を行った後、フォレスト・ノバの学生さん達のサポートで「木の時計づくり」や「フォトアルバム」などの木工作品の制作などのプログラムを実施した。

嵐山での間伐体験

■地元に製材所・集成材工場をつくり、生産・加工・販売までの地産地消のサプライチエーンづくりをスタート

地域材活用を促進させるために、2015 年２月にさがみ湖 森・モノづくり研究所を一般社団法人に法人化し、本格的に生産・加工・販売までのサプライチェーンづくりをスタートさせた。今までは天板の加工を他県で行っていたが、適正なコストで供給できる地元加工体制を第一優先に考え、地元に加工工場を確保した。製材所を都留市に設けると共に、藤野に集成材工場を設置し、地産地消の体制を確立した。そして、環境省の委託事業「協働取り組み加速化事業」として始めたサプライチェーンづくりの構築のために設立した「森とつながるフォーラム相模原」という協議会で川上から川下までの森林所有者、森林組合、林業事業者、木材産業者、住宅施工者、家具販売業者等の木材に関わる企業のネットワーク化を計り、地元の木材を積極的に活用していく活動を進めている。

協議会では川上と川下を繋ぐ「フォーラム事業」天板設置を推進する「森の机事業」、子どもたちの木育のための「環境教育事業」などを柱にサプライチェーン構築を目指している。

その後の成果を確認するアンケート調査を行い事業継続の可能性を精査した。

平成２８年にこの事業は終了するが、事業継続の可能性のために昨年から環境省の平成２７年度の「協働取り組み加速化事業」のモデル事業として、全国１７団体に選抜され、川上から川下までを繋ぐ地産地消のサプライチェーンづくりに取り組んでいる。今後の目標としてこの事業を自立できるようなシステムを構築していくために、相模原市全域の小学校で、この実践教育プログラムが実施され、結果として森の元気が子供の元気に繋がる「木育」に継続発展できることを願い、又広葉樹による天板製作が地元で適正なコストで生産され、供給される地産地消システムの確立を目標に活動していきたいと思っている。

協働事業の役割分担

相模原市
資金援助・実施校選定・広報

さがみ湖森・モノづくり研究所
統括・マネジメント

NPO法人緑のダム北相模
全国森林インストラクター神奈川会
森林体験学習実施

津久井郡森林組合・緑のダム北相模
学習机天板制作・設置

NPO法人さがみはら環境活動ネットワーク会議・国際理解教育センター
教材導入実施調査・モニタリング調査

左：緑台小学校４年生の新しくなった天板
中：加工工程を説明する津久井郡森林組会の坂本専務理事
左：フォトスタンドの制作、指導する有馬さん
右:MORIMO の製品『森のかるた」

右：「森のかるた」の使用説明書

地元のコナラ材でつくった天板

森とつながる構成メンバー

森林資源を活かした豊かな地域づくりを目的として、地域材の生産から販売までのサプライチェーンの構築のために木育、環境教育事業、地域材の広報活動など、森とつながる事業として「森とつながるフォーラム相模原」という協議会を設立し、会員とともに豊かな地域づくりを推進していきたいと考えている。

全校の天板を設置している地元の大工さん達

嵐山から搬出される杉の間伐材

都留市の製材工場

藤野に設置した集成材工場

■林業サプライチェーン研究所（WBJ）

国産材の流通の活性化に向け、長期的視点に立った林業経営を定着させ、木材サプライチェーンの仕組みを導入するために設立したものである。木材のサプライチェーンとは、森林立木から住宅等の建築用材として利用されるまでの流れを一貫したトレーサビリティーにより管理するもので、購入者である施主（建築業者）が安心して材木を購入できる流通システムである。中間コスト等がカットされ購入しやすくなるとか、木材生産者の顔の見える地域ブランドとしての活用ができるなどのメリットが期待できる。当研究所の実績は、昨年行った秩父でのトレーサビリティー事業がある。林分解析・分析の上、樹木にQRコードを貼付し、PCよるクラウドシステムで管理を行い、秩父産木材の伐採前の立木状況を３D計測し、計測データと符合するQRコードを立木に貼付、クラウドデータに乗せつつ、伐採から製材、乾燥、住宅用材として住宅建設現場までをすべての関係者が関わり、工務店と共にトレーサビリティーシステムで管理し、「来歴」記録をもった材木で住宅を完成させた事例が日経新聞に紹介された。これらの実績の過程で生じた様々な問題点を修復し、今年度は10棟分の「来歴」を持つ材木で住宅を建築する計画である。この実験の過程で判ったことは、必要な太さや長さの角材を伐採前に事前に選択できる為、必要な立木のみを伐採できれば、材木横持（材木市場に集積して保管する）費用をカットでき流通革命になると考えている。

このように林業サプライチェーンは林業分野でのエシカル消費の基盤づくりの構築に意欲を燃やしている。農林業における自然環境を損なわず、自然環境が良くなるための森林流通整備。地域社会・地域経済を損なわず、地域社会・地域経済を応援する体制づくりに貢献する為、当研究所では、引き続き測量技術の精度を高めるための研究とシステム構築により、木材トレーサビリティーによる地域材ブランドのサプライチェーンの確立に挑戦してまいります。

■ ForestInfo（フォレスト・インフォ）

森林所有者の高齢化に伴い適齢伐期であるにも拘らず、間伐作業が進んでいない為、コスト・品質・量などで外材に負けている。森林内の立木の調査を人の手足で測量してきたが、その負担を解消し正確なデータ収集するため、我々は研究者の㈱WoodInfoと提携し、大学や森林所有者からの依頼を受け、最新の機器３Dレーザースキャナーによる樹木測定を始めた。測定により、ＡＢ材の選択、胸高直径、樹高、体積、矢高（曲り）、製材区分などを97％の精度で計測できるようになった。

３Dスキャナーは、主に大型船舶・高速道理や橋梁・高層ビル建設の際使われているが、森林内で利用するのは初めての試みであった。

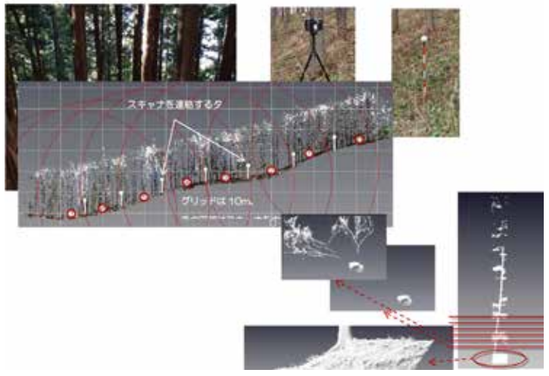
森林の３Dでの航空測量はご存じの方も多いと思いますが、空からですと立木の根本のデータが撮れないため一本の木の詳細データ収集することは困難でした。

初めての歩行測定により様々な新しいデータを知ることが出来るため、森林組合や国有林・大学演習林の毎木調査に活用されるようになった。

解析技術の向上とともに、測量スピードの短縮化、樹種の判別、樹木の10㎝毎の輪切り直径の計測さらにＧＰＳの搭載により同地点からの年次毎の毎木調査で同材積の成長㎥の計測などが可能になり、定点調査に活用されるようになった。

過去は人海戦術でしか林内の立木測量はできなかったが、合理化に向け、林業関係部門での需要は拡大するものと思われます。

新たに文化財建造物や公園樹林・天然記念物などの依頼も増えている。



1

さがみはら森林ビジョン実施計画について

森林ビジョン　掲載内容				重点事項
	基本方針	基本施策	主な取り組み項目	
「知る」アプローチ	① 市民への情報提供	①ホームページなど多様な媒体による情報発信の推進	森林づくり活動などの情報を提供するポータルサイトの開設・運営	
		②イベントなどの開催による普及・啓発活動の推進	市民向け森林体験教室などの開催の促進	
			催し物などでの情報提供の推進	
	② 環境教育の推進	①児童・生徒の環境教育の推進	森林をフィールドとした体験学習の推進	
			地域の自然や森林と人の暮らしなど、郷土に学ぶ活動の推進	
		②市民主体による環境教育の推進	市民が主体となって行う体験活動・交流活動の場としての森林の活用促進	
		③「木育」の推進	材料としての木材の良さや、その利用の意義を学ぶ、木材利用に関する教育活動（木育）の推進	
	③ 市民と森林の接点づくり	①市民が森林と触れ合う機会の創出	市有林等を活用した「市民の森」の整備の検討	●
			都市のみどりの保全・再生の推進	
		②都市地域と森林地域をつなぐ交流の推進	里地と一体となった里山の保全・再生、活用の推進	
			地域資源や人材を活用した体験・交流型観光プログラムの開発の推進	
		③多様な主体との協働による森林づくり体制の強化	市民や企業など多様な主体との協働による森林整備の推進	●
			森林ボランティアやインストラクターの育成・支援の推進	
「使う」アプローチ	④ 木材等の利活用の推進	①木材の利用拡大	材質に応じた木材流通の最適化の促進	●
			公共建築物への利用促進	●
			地産地消の促進	●
			木材の多様な利用のための技術・商品開発の促進	●
		②木材の安定供給体制構築に向けた取組み	効率的な木材生産システムの開発・導入促進	
			路網整備の推進	
			施業集約化の推進	
			林業の担い手育成	
			技術開発のためのモデル団地の設定	
	⑤ 森林環境の保全・整備	①健全な森林の保全・育成	適切な森林管理の推進	●
			森林所有者への意識啓発	
			森林の現況把握とモニタリングの推進	
		②市民生活を守る森林の保全・育成	鳥獣被害対策の推進	
			花粉症対策の推進	
			不法投棄対策の推進	
			残土処分地等の開発事業対策の推進	

2　さがみはら 森林ビジョン実施計画

沿革

1998 年　組織と沿革
相模湖・森つくりの会として活動を開始

2002 年　組織と沿革
「緑のダム北相模」として NPO 法人化
代表理事、鈴木重彦氏就任
相模湖・嵐山の森、活動開始
助成金・補助金事業
セブンイレブン記念財団（2014 年度、継続中）
国土緑化推進機構

2003 年　助成金・補助金事業
コメリ緑資金の会，損保ジャパン日本興亜 HD 環境財団，世界自然保護基金，日本財団，イオン環境財団
助成金・補助金事業

2004 年　世界自然保護基金，オルタナティブチャレンジネット神奈川イオン環境財団

2005 年　組織と沿革
FSC FM 認証取得
小原本陣の森活動開始
協働事業
かながわボランタリー活動推進基金 21（2009 年まで）
主催イベント
川崎ネイチャーフェスティバル（2009 年まで）

2006 年　組織と沿革
代表理事、永井宏一氏就任
助成金・補助金事業
国土緑化推進機構

2007 年　組織と沿革
国土緑化推進機構・会長賞受賞
助成金・補助金事業
国土緑化推進機構

2008 年　組織と沿革
国際ソロプチミスト協会・感謝状受賞
助成金・補助金事業
SPP サイエンスパートナーシッププロジェクト（東海大望星高校、2011 年まで）
主催イベント
森づくり・モノづくりコンテスト（2011 年まで）

2009 年　協働事業
相模原市民協働事業提案制度（2011 年まで）
助成金・補助金事業
国土緑化推進機構
主催イベント
相模原市民桜まつり環境ゾーン（2014 年度、継続中）

2010 年　組織と沿革
代表理事，石村黄仁氏就任
国際認証継続
助成金・補助金事業
国土緑化推進機構

2011 年　助成金・補助金事業
国土緑化推進機構
主催イベント
第 24 回世界建築会議・UIA2011 東京チェアシティ展

2012 年　組織と沿革
コカコーラ環境教育賞優秀賞
かながわ力大賞特別賞
全国大学生環境活動コンテスト準グランプリ
杉並区学校文化栄誉顕彰（地球環境部）
助成金・補助金事業
神奈川県もり・みず支援事業
22 世紀やま・もり再生ネット（2015 年度、継続中）
主催イベント
間伐材の積み木で東京駅舎をつくろう

2013 年　組織と沿革
麻布大学と連携協力に関する包括協定
主催イベント
自然・文化がある幸せを次世代へ（国連大 GEOC）

2014 年　助成金・補助金事業
国土緑化推進機構、一般公募事業・森林整備

2015 年　組織と沿革
FSC FM 認証継続終了
サプライチェーン構築：源流域山中湖・富士吉田市、上流域・大月市でシンポジュム協力参加
次世代を育てる「知足の森」活動開始

ご支援いただいている団体及び協働活動している団体

公益社団法人 国土緑化推進機構
WWFジャパン（世界自然保護基金）
FSCジャパン（日本森林管理協議会）
公益法人　大日本山林会
国際環境 NGO FOE Japan
かながわ県民サポートセンター
相模原市

毎日新聞社 水と緑の地球環境本部
神奈川新聞社

相模原商工会議所 都市産業研究会
津久井郡森林組合（相模原市）
北都留森林組合（山梨県上野原市）

一般財団法人 セブン－イレブン記念財団
公益財団法人イオン環境財団
公益財団法人 損保ジャパン日本興亞 HD 環境財団

上智大学アジア人材養成研究センター
東京都市大学環境情報学部環境情報学科咸研究室
日本大学生物資源科学部森林資源科学科丸山研究室
東京大学大学院農学生命科学研究科森林利用学研究室 酒井研究室
麻布大学

相模湖商工会
神奈川県建具協同組合
全国森林インストラクター神奈川会

㈱横浜工作所
㈱マルモ出版
㈱小林住宅工業
㈱トレカーサ工事
㈱金子建設
㈱山康商店
創和建設（株）
伊佐ホームズ㈱
（株）木林士
㈱エコナノクラブ
㈱トータルソリューション

森の駅推進協議会
NPO法人 さがみはら環境活動ネットワーク会議
一般社団法人 さがみ湖 森・モノづくり研究所
林業サプライチェーン研究所（WBJ）
ForestInfo
神奈川ネットワーク運動
㈱富村環境事務所
NPO法人自遊クラブ

相模川流域ネットワーク
相模川（富士山～相模湾をつなぐ）
○源流：緑のダム天上山の森
○上流：大月・森つくりの会
○中流：相模原市
○下流～相模湾
・鎌倉市：緑のダム 北鎌倉
・平塚市：緑のダム 湘南の森

・学生連合フォレストノバ
（麻布大学を核とする学生連合）
・望星の森東海大付属望星高校（渋谷区）
・生命の森宣言・東京
・東海大付属高輪台高校（港区）
・なみすけの森（三鷹市立第二中学校・地球環境部）

この報告冊子は、「セブン・イレブン記念財団」助成の一部を使用し作成いたしました。

NPO法人 緑のダム北相模
事務局：154-0023 東京都世田谷区若林 3-35-9
NPO法人 緑のダム北相模
TEL&FAX 03-3411-1636
URL：http://www.midorinodam.jp